

# 岐阜県郡上郡高鷲村の方言の記述的研究

江 端 義 夫  
(1980年9月10日受理)

## 目 次

- はじめに
- 第一部 表現法生活
- 第二部 生活語彙
- 第三部 音声生活
- おわりに

### はじめに

本稿で筆者は、岐阜県郡上郡高鷲村<sup>グジウゴウシヤカスムラ</sup>の方言について記述的研究を行う。

特定の方言共時態についての、体系的な記述的研究は、方言研究の中核をなすものであろう。方言統体を分析し、記述考察する研究が、常に、重要であることは、言うまでもない。

筆者は、昭和47年8月13日から8月19日までの一週間に、岐阜県郡上郡高鷲村の方言について、臨地調査を行った。

本稿は、中部地方域の方言についての方言地理学的研究の一部であり、それを補い深め、拡充させるための研究の一部である。

## 第一部 表現法生活

### 待遇表現法

動詞の動詞、助動詞に注目した待遇表現法を、とりあげる。文表現全体は、土地人の待遇敬卑の意識が、目されたものである。

#### (1) 尊敬表現法

##### A 尊敬の動詞による尊敬表現法

最初に注目されるのは、隆盛な「ゴザル」動詞の見る尊敬表現法である。

#### ① 「ゴザル」

全年層を通じて、動詞「行く」「来る」「居る」の尊敬語として、「ゴザル」動詞が、盛んに使用されている。

「行く」の尊敬語として、「ゴザル」が次のように聞かれる。

○ドコエ ゴザッタ ナ。(老女→筆者) どこへ行きなされたの？

また、「来る」の尊敬語として、「ゴザル」が次のように聞かれる。

○シモカラ ヨーゴザッタ ジャ ワイ。(老女→老女) 川下の方から、人がよく来られたよ。

土地の一老女は、「ゴザッタ」は昔からのことば、「ミエタ」は30年くらい前からのことば」と説明する。また、青年女子の説明では、「ふつうは、「来た」ことを「ゴザッタ」と言う。「来られた」ことを、稀に「オイデタ」「ミエタ」と言う」のようである。

次の実例では、「ゴザル」が、「神様」を主部とした文表現に見える。「ゴザル」は、最高待遇に使用される事象である。

○カミサン シッテゴザル。(老男→老女) 神様は、知っていないさる。

神と人との媒介者である教祖の言動についても、「ゴザル」が用いられている。

○ソレオ シッテゴザル。(中男→筆者)

次のは、隣人の行為についてのうわさ話である。

○ナニセ クライウチカラヒータイテゴザル。(中男→筆者) 何しろ、朝暗いうちから、火を燃しておられる。

○ハイッテ ゴザル。(老女→老女) 入っておられる。

次の実例は、体言にかかっていく「ゴザル」である。

○モッテ ゴザルヒトワナー。(中男→筆者) 持って来られる人はね。

○ココノ コトーイチイチシッテゴザルコト ナイ。(中男→筆者) この事を、一々、知っておられることはないはずだ。

これらは、性別を問わず用いられ、中等品位以上の文表現価値が醸成されている。しかし、少年層者以下には、「ゴザル」の使用が、極めて稀である。

次の実例は、「ゴザル」の仮定形である。

○ホイテ ケーテ ゴザッタラ……。 (中男→筆者)  
そして、聞いて来られたら……。

外来者である筆者に対して、「ゴザル」が使用されている。

ところで、筆者は、「ゴザル」の命令形「ゴザレー」または「ゴザイ」を、一度も、聞く機会がなかった。当地での「ゴザル」は、命令形から順次、衰退しているとしているのである。

## ② 「ミエル」

これは、比較的新しい事象である。尾張地方から、岐阜県の高鷲村の方へも伝播して来たのであろうか。「ミエル」は、次のように、老年層でも中年層でも、青年層でも使用されている。

○カエツテ ミエタ。 (老女→筆者) 帰っておられた。

○カエツテ ミエル。 (老女→筆者) 帰っておられる。

○シコト シテ ミエタ。 (老女) 仕事しておられた。

○アンカイ トッテ ミエン ナ。 (中男→筆者) 案外、都会の人も取っておられないね。

○ナンテ イツテ ミエル。 (青年女→筆者) 何と言っておられるの？

土地人は、「ミエル」を使った言い方を、あらたまった場での品の良い表現と考えているようである。従って、土地人同志の会話では、特に、「ミエル」を使うことによって、却って、しらじらしさを感じさせないために、別の尊敬表現が行われるようである。

## B. 尊敬の助動詞による尊敬表現法

親しみの尊敬表現を仕立てる「セル・サッセル」助動詞を使用した表現が、広く、行われている。

## ③ 「セル・サッセル」

○ナンニモ シラッセンテ ワッセル ヨナ。 (老女→老男) あの人、何もご存知ないとおっしゃるよねえ。

助動詞「セン」と「セル」とが、同一文中に併存する。緊密な待遇敬卑の関係が、示されている。

次の例は、土地人についての噂話である。

○ソー ユーゴト イワッセン。 (中男→筆者)

加藤さんは、そういうことを、おっしゃらない。

○イワッセンナダ。 (老女→筆者) おっしゃらなかった。

「セル」は、時制の如何を問わず、盛んに用いられる。また、「サッセル」も、「セル」と同様の用法を持つ。

○ソー ミサッセン カ。 (老男→老女) それほど、ご覧にならないか。

上の例は、軽い敬意をこめて、用いられている。尊敬というよりは、親情の気味が、醸成されている。

○ヤーット ミサッセンデ ミトクレ。 (老女→老女) 長く、ご覧になっていないのだから、見てください。

上の例は、友達間でのもの言いである。夫婦間の、くつろいだ会話にも、「セル・サッセル」が聞かれる。

○ナニワ サッセンダ ナ。 (老男→老女) 何は、なさらなかったよねえ。

上来の、助動詞の連用形には、次のように、「セ(た)、シ(た)、ショー(た)、サン(た)」の四つの表現形式がある。

○コーガタノ トラクターオ カワッセタ。 (老女→筆者) 小型のトラクターを、お買いになった。上例の文などでは、「セタ」と同時に、「シタ」も、あり得る。「セタ」よりも「シタ」の方が優勢である。

○チョット ヨツテ カシタ。 (老女→筆者) ちょっと、立寄って行かれた。

○ゴエノ エー シューワ オンド トラシタ ゾナ。 (中男→老女) 声の良い衆は、音頭をとられたよ。

○ハーラッパイ ウタワシタ ゾナ。 (老女→筆者) 腹一杯、存分に、お歌いになったよ。

○ソー ワシタ ナ。 (老女→老女) そう言われたよね。

○オツトメ シワシタ カ。 (老女→老女) おつとめ(念仏)しなされたか？

○ミテ カシタ ゾエ イワシタ。 (老女→老女) 見て行かれたよって、言われた。

第三者の発言や行動を、間接話法または直接話法で、対話者に伝える表現に、この助動詞が多く表われる。

○ナイ ヨン ナツテ ワシタ ナ。 (老女→中女) 無いようになったって、言われたね。

○クソダイジョーカンノ オヤダマジャテ ワシタ。 (老女→老男) 糞太政官の親玉だと言われた。

○メージニ イッベン アツッテ イワシタケン ド ナー。 (中男→筆者) 明治に、一度、火災があったと、言われたけれどね。

動作継続態の表現では、「セ」または「シ」に「ヨ(た)」を後接させ、「ショー(た)」と言われる。

○クワシュータ コトガ<sup>o</sup> ナイ。 (老男→筆者) お食べになっていたことがない。

○ソトエ デサッシュータ。 (老女→筆者) 外へ働

きに、出ておられた。

さて、「サッセル」の連用形は「サシ(た)」である。

(1) ナガイモノ タネ モッテ キテ ウエサシタ。  
(老女→筆者) 長芋の種を持って来て、この谷に植えなされた。

ト一段活用の動詞の連用形に、「サシ(た)」が添加している。

次の文例では、「セル・サッセル」の基本形(終止形)が認められる。

(1) カミサンカ° オラッセル。(老男→筆者) 神様が居なさる。

尊崇される最高の神に対しても、「セル」が使用されているのが、注目される。

(1) コンナ ハガ° デキタ イワッセル。(老女→筆者) こんな葉ができたよ、言いなさる。

(1) ヤッバリ タベテ ミルト オイシー イワッセル。(老男→筆者) やはり、食べてみると、おいしいとおっしゃる。

(1) ヒノキオ ツカワッセルケンド ドタイワ クリジャッタ。(中男→筆者) 普請に松を使われるけれど、土台は、栗の木だった。

これらは、生活風景の推想される文例である。また、前者を話題にした、次のような実例がある。

(1) トッジョリニ クレル クスリワ ヒカッセルジャモノ。(老女→老女) 老人にくれる薬は、値段を、医者が割引きなさるのだよ。

(1) ホンニンニ ツーチサッセル。(老女→老女) 本人に、先生が通知しなさるよ。

1. 出の後の文例では、文末声調が上昇波形になっている。これは、質問の昇調でなく、親愛の意の判叙の昇調である。

次に、「セル・サッセル」の体言にかかっていく文法点を掲げる。

(1) タベラセル ヒトモ アル。マズーテ タベレン。  
(中男→筆者) お食べになる人もいる。しかし、まずくて、食べられない。

(1) ツクラッセル ヒトモ アル。(老女→筆者) お作りになる人もいる。

(1) イワッセル ヒトダッタデ ナー。(老男→老女) 不平をおっしゃる人だったからねえ。

「セル」が動詞に下接する時、「セル」の前に促音をいんで、「ッセル」となることが多い。ところが、「サッセル」が動詞に下接する時、ほとんど、「ッサッセル」とはならない。

次の実例は、「セル・サッセル」の仮定形である。

(1) キーテ ミラッセヤ トッジョリワ シットル

ワイ。(老男→老女) 聞いてご覧になれば、年寄りには、知っているよ。

○モットモ カネ<sup>ニ</sup>モ<sup>ケ</sup>ニ デテ カッセヤ カワ<sup>ニ</sup>ラフ。(中男→筆者) もっとも、金儲けるために、村を出て行かれれば、変らない。

次に、「セル・サッセル」には、命令形「セー・サッサー」のあることが、注目される。

○イカーズヤニ サッサー。(老女→老女) 行きたいように、しなさい。

これは、共通語の慣用的な言い方では、「したいようにしろ」に当る。「イカーズ」は、「行かむず=行かむとす」であり、「ヤニ」は比況の言い方で、「やうに」の簡略語である。

○ミタケヤ ターント ミサッサー。(老女→老女) 見たければ、十分に、ご覧なさい。

以上、「セル・サッセル」は、主として成人層で、尊敬表現法を醸成せしめる助動詞として、活発に用いられている。しかも、性別の如何を問わず、対象の上下を包摂して、広く盛んに、使用されているのである。

この「セル・サッセル」は、「シャル・サッシャル」と同系統の事象であったと考えられる。

#### ④ 「ナレル」

「ナレル」は、「セル・サッセル」に次いで、よく聞かれる尊敬の助動詞である。

○ヤッバシ ミンチー ミオイレテ ツクンナレンゾナー。(老女→筆者) やはり、みんな、身を入れて、作りなさらないよねえ。

○イマワ チョットモ ツクリナレンケド ナー。  
(老女→筆者) 今は、少しも、作りなさらないけどね。

敬意の度合の、あまり高くないもの言い、「ナレル」の用いられることがある。それは、「セル・サッセル」のばあいと似ている。たとえば、

○イーナレタ コトー イワシタト ユー。(中女→筆者) 「言いなさった」ことを、「イワシタ」と言う。

のようにである。同等品位の敬語と見立てて、言い換えが、なされるのであろう。

次の実例では、年寄り(老人)が、尊敬される。

○トッジョリシュー イーナレルシ ナー。(中女→筆者) 年寄り衆が、言いなさるしねえ。

次のは、補助動詞的な働きをになう「ナレル」の実例である。

○ノムナ ノムナ イッテナレタが……。 (老女→老女) 飲むな、飲むなど言っておられたが……。

次のは、不特定の村人一般が、話題の主である。

○ゼンマイ ミンチー トッテター シウオー ツケ

テ オイテ タベナレ<sup>ル</sup>ンヤ ナイ カチ。(老女→筆者) 薇を、皆が山野で採って、それに塩をつけておいて、食べなさるのではないかね。

④ ○モ<sup>ー</sup> ミンナー ア<sup>ノ</sup> コノ トカイユ イット  
ツテ イッショニ ナン ナレ<sup>ル</sup>モンデ ナー。

(老女→筆者) もう、みんな、あのう、このう、都会へ行って、結婚しなさるものだからね。

○ホンデ ヤマシコトオ ナー。ヤンナイタモンデ。  
ミンナ。(老女) そして、山仕事をね。冬に土地人はやりなされたから。全員。

○トショリシュー イ<sup>ー</sup>ナレ<sup>ル</sup>シ ナー。(中女→筆者) 年寄り衆が言いなさるしね。

以上、「ナレル」を用いた言い方は、当地での、注目すべき、特色のある尊敬表現の一つと言えよう。

### ⑤ 「レル・ラレル」

○チンカ イ<sup>ー</sup>オラレ<sup>タ</sup>。(中男→筆者) 何か、言っておられた。

これは、よそいきことば、あるいは外来ことばの感が深い。むしろ、「チンカ イ<sup>ー</sup>ナレ<sup>タ</sup>。」などと言う方が、あらたまり意識が少ないか。老女の説明に、“ていねいに言えば、「コラレ<sup>タ</sup>」であって、「コラシ<sup>タ</sup>」とは言わない。”というのがあった。「レル・ラレル」敬語は、品位が高く、よそよそしいのであろう。

### ⑥ 「ナサル」

共通語として盛んな「ナサル」尊敬表現は、当地においては、ごくわずかにしか、聞かれない。

○トクドーオ ウケナサ<sup>ツ</sup>。(老女→筆者) 得道をお受けなされた。

「ナサル」の使用は、特定の人、特定の場合に限られている。上例のように、僧侶などの、特別の言動について使用されることがあり、極めて品位の高いものとなっている。以下も、同様である。

○フクキョ<sup>ー</sup>ニ ア<sup>ー</sup>ユ<sup>ー</sup> コト ハジメナサ<sup>ツ</sup>ンデショー。笑(初老女→筆者) 住職の息子は、副業にああいうこと(料亭旅館)を、始めなされたのでしょ。笑

○ホカワ タツテ シマツテ モー ヤリナサ<sup>ラ</sup>ンツテ。(初老女→筆者) 他の部落では、25日講は断ってしまって、もうなさらないうて。

### ⑦ 「ヤス」

これは、「セル・サッセル」「ナレル」などの隆盛なものと比べて、劣勢の事象である。また、「ヤス」の用法も、広くないようである。

○トタンデ フイチマヤシ<sup>タ</sup>。(中男→筆者) 屋根を、トタン板で、葺いてしまいなされた。

○オトイテマヤシ<sup>タ</sup> チ。(老男→筆者) 落してしまいなされたよ。

「ヤス」が、やや、ぞんざいな文表現の中で使われている。敬意の度合も、あまり、高くない。

「ヤス」は、すでに、敬意漸減の一途をたどりつつある事象であると、考えられる。

### ⑧ 「ヤル」

「ヤス」の行われる一方で、「ヤル」が、行われている。

○イキヤ<sup>ツ</sup>。(老男→筆者) 行きなされた。

「ヤル」の連用形「ヤツタ」が、次のように、「ヤータ」として行われるのが、一般的である。

○オセ<sup>ー</sup>テリヤ<sup>ー</sup>タ。(老女→中女) 教えていなされた。

かつて、「ヤル」助動詞が、この土地でも、盛んに用いられていたことであろう。今では、「ヤル」の使用年齢は、老年層に限られ、活用形も、主として連用形が、行われるに留まる。

以上が、いわゆる尊敬の動詞、助動詞を用いて行われる当地方言での、尊敬表現法の記述の概要である。

## (2) 謙讓表現法

謙讓の動詞、助動詞を用いた表現で注目されるのは、「クダサル」類の、もの言いである。

### ⑨ 「クダハレル」

○カンノソ<sup>ノ</sup>サマガ<sup>マ</sup> マモツテ クダハレルダデ……。 (老男→筆者) 観音様が、守って下さるので……。

### ⑩ 「クダレル」

○ヨ<sup>ー</sup> ソノ クライ シト クダレル。(老女→老女) よく、そのくらいにして下さいませね。ここには、ねんごろな感謝の気持が、こめられているのである。「クダレル」は、「クダサレル」>「クダハレル」>「クダレル」である。

### ⑪ 「クダハル」

○チート キ<sup>ー</sup>テ クダハル。(老男→筆者) 少し聞いて、くださる?

これは、「クダサル」の音転化によって生じたものと、考えてよいであろう。「クダハル」を、主に老年層者が用い、「クダサル」を、主に若年層者が用いている。しかし、これらは、頻繁に使用されるほどではない。

あまり使用されない語は、活用形の固定化を見せ易い。そこで、これは終止形と命令形にだけ、特に偏して、遺存する。

命令形の実例は、次のようである。これは、他家訪問のあいさつである。

○ゴメン シテ クダハレ。(中男) ごめんなさいませ。

次の例では「クダハレ」の用法を、教示された。

## 第二部 生活語彙

チートデ エーニ オシエテ クダハレ。(老女)  
少しでいいから、教えてください。

### ① 「クダサイ」

「クダハレ」の存する一方で、「クダサレ」のラ行音が脱落した形の「クダサイ」が認められる。

(1) ロッチ キヤイテ クダサイ。(老男→中女) こっちの燈を消してください。

これは、あらたまったもの言いである。男性が、くつないだ気分で、気安く言う時には、「クヨ」を使う。

### ② 「クヨ」

(1) チョット カイテ ミテ クヨ。(中男→筆者) ちょっと書いてみてくれ。

「クヨ」は、「クレヨ」ないし、「クリョ」から、ラ行音を脱落せしめて、生成されたものであろう。

### ③ 「クレ」

次の例は、気心の知れ合った村人同志の会話である。

(1) オンドリニ キテ クレ ナ。(老女→中女)  
祭の音頭とりに、来てくれよ。

### (3) 丁寧表現法

丁寧な表現を生成する事象として、共通語のと同様で、「マス」助動詞がある。これは、土地人同志の会話では、あまり行われていない。外来者に対するものだけに、使用されがちである。

### ① 「マス」

(1) ジンジャ アリマス。(老女→筆者) 神社は、近くにあります。

(2) ツーカモ シレマセナー。(老女→筆者) そろくかもしれませんね。

(3) オーボラッテ トコガ アリマス ワナー。(老女→筆者) 大洞という部落が、ありますわねえ。

次に、「デス」助動詞がある。これは、主として、土地人以外に対して、ていねいな表現をしようとする時に、使用されるようである。

### ② 「デス」

(1) イマ ソレガ センゼン デキンデショー。

(初老女→筆者) 今、盆や正月の食事が、全然、できないでしょう。

(2) デモ ミミガ トオイデショー。(老女→筆者) でも、あのおばさんは、耳が遠いでしょう。

(3) センセーガ ツクリタイター アレ シッテ ユウンデス ガ。先生が作りなされた石碑のあれは、詩と言うのですか。(老女→筆者)

これらの「マス」「デス」の見られる表現はすべて、土地人である筆者に対する丁寧意識の発現と見られる。丁寧の距離を設定した文表現が、醸成されている。

岐阜県郡上郡高鷲村の方言生活における、生活基本語彙について記述する。筆者は、自然傍受法を旨とした調査によって得られた資料を、生活の自然にかんがみ、生活語彙の概要を、以下に記述する。記述にあたっては、簡略を旨とし、生活一般語彙を割愛する。

## 1. 人間語彙

### (1) 人

デッチ 男の普通称。

ボー 少年。

アカンボー 赤ん坊。

ビンダ 女の普通称。中学

校卒業頃までの女の呼称。

デチビンダ 男まさりの女。

おてんば娘。

ビー 少女。

### (2) 性向

ドーネキ 強情者。

ジラ 強情。

ゴクドー 放埒な人。

ヤンチャナコ 乱暴な子。人。

ズレッコ わがままな子

ユウシ 唾。

ギッチョ 左利き。

ザット 男の座頭。

ゴゼ 女の座頭。

ベンコー おしゃべりな人。

ナキビソ 泣きむし。

シミタレ 身じまりの悪い

ターケ たわけ者。

ドダワケ 馬鹿。

### (3) 人体部位

シタベラ 舌。

ツバキ 唾。

ヨド よだれ。

ホホタンボ 頬。

ヒザカブ 膝。

キビソ かかと。

ケツ 尻。

### (4) 病

アイマチ けが。

ヤケズリ 火傷。

テンボ 片方の腕の人。

アタマヤメ 頭痛。

アザ 痣。

イボ 疣。

ホクロ 黒子。

フスベ 黒子。

セキリ 赤痢。

ライビョー 癩病。

## (5) 遊び

アスビ 遊び。  
オドケ 冗談。  
チチッポ 石巻。  
チチッポ 同上。  
オジャミ お手玉。  
アブラコ 川車。  
チンチン 片足とび。  
チンガラコ 同上。  
マクリガイコ 鬼ごっこ。  
テンマリ 手まり。

ワンコ 子どもの下駄。  
ハダシバキ 裸足。  
下ベ 最後。  
モヤイ 共同利用。  
テジナ 手品。  
アイダカケ 鮎かけ。  
トアミ とあみ。  
ネリ 村祭のねり歩き。  
ヤッコ 神楽。  
ゴマ ごまかすこと。

## 2. 生業語彙

### (1) 労働

マクロー 馬くろう。  
コニヤ 染物屋。  
ヨシナベ 夜業。

ヤマミチニンソク 無賃労働奉仕。  
ヤマニンソク 同上。

### (2) 山仕事

ガンド 鋸。  
ゴマイヌキ 五枚めの歯  
ごとに抜いてある鋸。  
バイタ 犬追いの棒。  
ハリキ 割り木。  
ヒコ 腰にさげる小かご。  
ヌキナシ ヒコよりも、や  
や大きい籠。

センバ 十能。  
スミヤキ 炭焼き。  
バシヤ 馬車。  
クエ 杭。

### (3) 田畑仕事

テンビンボー 天秤棒。  
ニナイボー 同上。  
ダラオケ 下肥を運ぶ桶。  
シトダル 同上。  
シャーク 柄杓。  
ソメ 案山子。  
ハサ 稲架。  
クサカラニュー 稲叢。

ケジカキ 雑草用の熊手。  
ゴンカキ 熊手。  
クマデ 熊手。木の葉をか  
き集めるのに用いる。

## 3. 食生活語彙

アサメシ 午前5時ごろ  
の食事。  
アサゴハン 同上。  
ヒルメシ 午前10時ごろ  
の食事。  
コビリ 午後2時ごろの  
食事。  
ユメシ 午後7時ごろ  
の食事。

ゴツォー ごちそう。  
ジミソ 地味噌。  
ツケアケ てんぶら。  
ヒキズリ 好き焼き。  
アッポ 餅。幼児語。

## 4. 衣生活語彙

キリモノ 着物。  
オベ 同上。  
デンチ 袖なし。  
ソデナシ 同上。  
ドーマル 同上。  
ドーミ 袖のある着物。  
ドーキ 同上。

ドーミノ 蓑。  
アカイベ 晴れ着。見語。  
ツツポ 丈の短い袖。  
ナカソデ 丈の長い袖。  
タモト 同上。  
ホトコロ 懐。

## 5. 住生活語彙

### (1) 家

ウチ 私の家。  
ノキ 家の外。  
カイド 門口。  
ニワ 庭。入口の土間。  
ヒノリバ 外庭。  
スマ 隅。  
エンゲ 縁。  
イエンプチ 縁側。

スイホロ 風呂。  
チョーズバ 大便所。  
センチ 同上。  
カンジョー 便所。  
トントンプキ 屋根板一枚  
の葺き方。

### (2) 台所

チャマカ 茶釜  
ゴトク 冬暖炉の道具。  
キリバン まな板。  
ナカタナ 庖丁。  
スリコキ 連木。

ショウケ 竹の箎。  
テヌクイ 手拭い。  
コシテノコイ 腰にさげた  
手拭い。

## 6. 動物語彙

### (1) 識別

オソツ 雄。主に鶏。  
メソ 雌。主に猫。  
メンツ 雌。主に鶏。

(2) 身近な鳥

カラス 鳥。  
ツバクラ 燕。  
ツバクロ 同上。  
スズメ 雀。  
ノリツケホーセー 桑の鳴き声。  
ノリツケホーホー 同上。

(7) 土中小動物

オモラ もぐら。  
ケランマ けら。  
アリゴ 蟻。  
メメズ みみず。  
オケタガ 丸くなる百足。

(3) 身近な昆虫

ボンゼミ みんなん蟬。 イネドンボ 赤とんぼ。  
タケタケ 熊蟬。 カタナシトンボ 鬼やんま。  
セミノコ 蟬の幼虫。 トンボノコ やご。  
トンビムシ いなご類。 カマクラトンボ 大きなとんぼ。  
トンプシ いなご。 んぼ。  
オバタバタ 精霊バッタ。  
ウラビムシ 黄金虫。  
マメムシ 同上。  
クリタマムシ 栗の木につく虫。  
ムツゴ 蛭。  
ハイブ 蛆。  
クソブンブン 糞蛆。

(1) 栽培植物

コメ 米。  
コムギ 小麦。  
オームギ 大支。  
ソバ 蕎麦。  
アワ 粟。  
ゴンボ 牛蒡。  
ニンジン 人参。  
グソバ 葛。  
フキ 蕺。  
ナンバン 唐辛子。  
イズ 柚子。  
スーメ 芋。  
ゴミ 胡頹子。  
ホボ 実。  
ボボ 同上。  
ツナビ 桑の実。  
ヤマモモ 山桃。  
ネブカ 根木。  
ショウガ 生姜。  
ラッキョウ 辣韭。  
ラッカセイ 落花生。  
ワサビ 山葵。  
イエンド えん豆。  
アゼマメ 大豆。  
ナスビ 茄子。  
サトイモ 里芋。  
サツマイモ 甘藷。  
タウイモ じゃがいも。  
カブチャ 南瓜。  
キビ 玉蜀黍。  
ササキ 大角豆。  
クボコ 煙草。

(4) 家畜

ウンマ 馬。 ニワトリ 鶏。  
ゴツテ 雄牛。  
オナメ 雌牛。

(2) 自生植物

クサ 草。  
ケジ 雑草。  
オバコ 車前草。  
ハコベラ はこべ。  
スホナクサ 杉菜。  
イタドリ 虎杖。  
フキボボソー 蛇のひげ。  
ロクタビ どくだみ。  
アエ 雑木。  
ネムノキ ねむの木。  
ナルテン 南天。  
イバラ 茨。  
ススキ 薄。  
ハキ 萩。

(5) 水中小動物

エンドバイ 小形あまご。 アイ 鮎。  
アマコノハイ 同上。 アカモト 白鮫。  
ハリソト 同上。 カイカラ 貝殻。  
ウクアイ うぐい。  
イワチ いわな。  
アマゴ やまめ。  
メンカチ 目高。  
ドジョウ どじょう。  
ガニ 蟹。

(6) 陸上小動物 (両生類, 爬虫類, 軟体動物)

ドンビキ 蛙。  
ドーシャ 蝮。  
ヘンビ 蛇。  
ヘンベ 同上。  
ウチヘンビ 青大将。  
マムシ 蝮。  
トカゲ 蜥蜴。  
トカキ 同上。  
シャクジロ なめくじ。  
デンデンムシ 蝸牛。

8. 天象語彙

テンズク 空模様。  
オヒサマ 太陽。  
ニジ 虹。  
カネコリ 氷。  
タイフー 台風。  
テッポーミス 鉄砲水。  
ケカチ 被害。

## 9. 地勢語彙

ヒューモ 日向。	タンボ 田。
オンジ 陰地。	スマダ 沼田。
ハザマ 畚。	ヌマカットルタンボ
テッペン 山頂。	同上。
ヤマノアタマ 同上。	アワラ 年中、水のある田。
テンズチ 同上。	ホセタンボ 乾田。
ヒラ 山の坂。	ウネ 畝。
イワス 岩。	タノネキ 田の側。
	ボタ 田の畔。土堤。
	ユスイ 水路。
	ユボタ 水路の土堤。
	タメイケ 溜池。
	ミナクチ 水口。
	ドンボ 川の深い淵。
	テーパー 川の土堤。

以上の生活語彙を総覧すれば、高鷲村の、農林業に精励する毎日の生活が、とらえられよう。上掲の基本的な方言語彙の周辺に、膨大な語彙が参集して、高鷲村の方言語彙体系ができていとされよう。

## 第三部 音声生活

高鷲村の方言の音声生活のうち、筆者は、語アクセントの実態について、記述的考察を行う。

語アクセントの調査は、単語カードを、一枚一枚、めくりながら、話者に読んでもらうという方法に依った。話者は、次のとおりである。

山田 福松	48才	昭和13. 5
山田しづ子	43才	昭和 3. 10
北洞 芳枝	30才	昭和16. 4
内ヶ島 巧	16才	昭和31. 11
蓑島 昇一	16才	昭和31. 9
和田 徳夫	15才	昭和32. 2
出口 清和	15才	昭和32. 1
川端 康子	14才	昭和33. 8
川端 美雪	13才	昭和34. 8
内ヶ島弘子	13才	昭和34. 2

上記10人の話者について、合計219語の語アクセント結果が、得られた。はじめに、10人に共通して認められる語アクセントの具体相を記述する。次いで、10人のうち1人にも語アクセントの形に差異が認められた語彙について、その事実を明らかにし、それらの原因について考察する。

## (1) 2音節名詞の場合

### ① 10人に共通する語彙

アメ(雨), イド(井戸), クモ(蜘蛛), コエ(声)  
 コト(琴), マド(窓), アキ(秋), コイ(鯉)  
 サル(猿), ツル(鶴), ツユ(露), ハル(春)  
 アメ(飴), ウメ(梅), エダ(枝), カゼ(風)  
 カネ(金), カマ(釜), サケ(酒), コイ(恋)  
 タケ(竹), ハナ(鼻), カキ(柿), カミ(蟹)  
 キリ(霧), クチ(口), コシ(腰), ハジ(端)  
 ハチ(蜂), ミズ(水), ウタ(歌), オト(音)  
 カタ(型), カワ(川), クラ(鞍), シモ(下)  
 ハタ(旗), ヒト(人), ムネ(胸), イシ(石)  
 カキ(垣), カミ(紙), セミ(蟬), タビ(旅)  
 ツル(弦), ハシ(橋), ヒル(昼), ユキ(雪)  
 アワ(泡), カワ(皮), クサ(草), クラ(介)  
 コト(事), ハナ(花), アシ(足), イヌ(犬)  
 ガイ(貝), カミ(髪), スミ(炭), タイ(鯛)  
 ノミ(虱), ミミ(耳), アワ(粟), イト(糸)  
 イネ(稲), カサ(笠), カタ(刃), カマ(鎌)  
 ゲダ(下駄) フラ(空), フネ(船), イキ(息)  
 ウミ(海), カミ(上), フミ(盤), ムキ(麦)。

### ② 差異の認められる語彙

キリ/キリ(桐) = 3 : 7, キリ/キリ(錐) = 5 : 5,  
 スミ/スミ(隅) = 5 : 5, ハシ/ハシ(箸) = 9 : 1,  
 カミ/カミ(神) = 7 : 3, クモ/クモ(雲) = 7 : 3。

以上の2音節名詞について、語アクセントの事態を見ると、総じて、これは、東京式の語アクセントに類似していると言える。差異の認められる語彙は、調査した2音節名詞の約7%にあたる。詳細に見れば、「神・雲」の語アクセントの変相では、壮年層者の○  
 ○に対する少年層者の○の対立が原因である。少年層者は、共通語化よりも、従来からの異化に従ったのか。

## (2) 3音節名詞の場合

### ① 10人に共通する語彙

ツクエ(机), サカナ(魚), キモノ(着物), カスミ(霞),  
 イワシ(鰯), イカリ(錨), チカラ(力), アズキ(小豆),  
 アタマ(頭), オトコ(男), オメ(女), ヒコ(東),  
 フクロ(袋), ココロ(心), イチゴ(苺), ウサギ(兎), スズメ(雀), セナカ(背中),  
 ネズミ(ねずみ)。

### ② 差異の認められる語彙

コカネ/コカネ(黄金) = 9 : 1, コムギ/コムギ



(小麦) = 8 : 2, サザエ / サザエ / サザエ (栄螺)  
 = 7 : 2 : 1, ミサキ / ミサキ (岬) = 1 : 9, タカ  
 ラ / タカラ (宝) = 9 : 1, アサヒ / アサヒ (朝日)  
 = 9 : 1, イノチ / イノチ (命) = 7 : 3, カレイ /  
 カレイ / カレイ (鰈) = 3 : 4 : 3, スガタ / スガタ  
 (姿) = 7 : 3, ナミダ / ナミダ (涙) = 4 : 6, カ  
 イコ / カイコ (蚕) = 6 : 4, カラス / カラス (鳥)  
 = 7 : 3。

壮年層で、〇〇〇 (命, 朝日, 姿, 涙) および〇〇  
 〇 (鳥, 蚕) のように発音するのに対して, 少年層で  
 は, これらをすべて頭高型にして, 〇〇〇のように発  
 音する。若年者の3音節名詞の語アクセントには, 語  
 類の別を越えて, 頭高に発音する傾向が認められるよ  
 うである。

### (3) 1音節名詞の場合

#### ① 10人に共通する語彙

カガ (蚊), コを (子), ミガ (火), ミを (身),  
 ヒが (日), ヤを (矢), エを (絵), キを (木),  
 スを (酢), タを (田), テを (手), ミを (荷),  
 ネが (根), フを (野), ヒを (火), キが (穂),  
 メを (目), ヨを (湯), ハが (俯), ヒが (火),  
 メが (芽)。

#### ② 差異の認められる語彙

エを / エを (柄) = 4 : 6, チが / チが (血) = 1 :  
 9, トを / トを (刀) = 1 : 9, ホを / ホを (帆) =  
 9 : 1, ナを / ナを (名) = 5 : 5, ハが / ハが (葉)  
 = 6 : 4, モを / モを (満) = 7 : 3, オを / オを  
 (尾) = 9 : 1, コを / コを (粉) = 9 : 1, ナを /  
 ナを (菜) = 9 : 1, キを / キを (女) = 5 : 5, ス  
 を / スを (洲) = 7 : 3, ネが / ネが (値) = 9 : 1。

上掲のように, 1音節名詞では, 語アクセントの型  
 の知覚が, 多様であるかに見える。しかし, 10人中,  
 語アクセントの高低に差異の認められた13語について,  
 分析してみれば, 事実は明白である。血・刀・帆・尾  
 ・粉・菜・値の7語については, 10人のうち, 特定で  
 ない一人が, それぞれ, 他者と異なる語アクセント形  
 を示したのにすぎない。したがって, 1音節名詞の場  
 合, 相当に, 語アクセントの一致の割合が, 高いと言  
 えるのである。

### (4) 2音節形容詞の場合

#### ① 10人に共通する語彙

ハイ (良い), ナイ (無い)。

ここでは, 特に言うべきほどのことがない。

### (5) 3音節形容詞の場合

#### ① 10人に共通する語彙

アカイ (赤い), アツイ (暑い), カライ (辛い),  
 アマイ (甘い), ウスイ (薄い), オソイ (遅い),  
 オモイ (重い), カルイ (軽い), トオイ (遠い),  
 アオイ (青い), アツイ (暑い), キヨイ (清い),  
 サムイ (寒い), チカイ (近い), ヒクイ (低い),  
 フルイ (古い), ヤスイ (安い)。

以上のように, 形容詞については, 10人全員が, 例  
 外なく, 同じ語アクセント状況を示した。この100名  
 の一致ぐあいは, 3音節名詞での不一致ぐあいと比較  
 して, 非常に興味深い事態である。

### (6) 2音節動詞の場合

#### ① 10人に共通する語彙

ナク (泣く), ノル (乗る), ウル (売る), ヤク  
 (焼く), イク (行く), ネル (寝る), アウ (合う),  
 カク (掻く), カク (書く), フム (飲む), フク  
 (吹く), クル (来る), デル (出る)。

#### ② 差異の認められる語彙

ウツ / ウツ (打つ) = 9 : 1。

以上のように, 2音節動詞に関しては, 「打つ」以  
 外は, 全員が, 同一の型を示した。

### (7) 3音節動詞の場合

#### ① 10人に共通する語彙

ワタル (渡る), キエル (消える), アケル (開ける),  
 ノボル (登る), スズム (進む), イノル (折る),  
 ニガス (逃がす), ウゴク (動く), オトス (落とす),  
 ニデル (逃げる), ノビル (伸びる), オチル (落ち  
 る), マイル (参る), カグス (隠す), ハコブ (運  
 ぶ), オ下ル (踊る), アラウ (洗う), イタム (痛  
 む), オモウ (思う), トオル (通る), クデル (建  
 てる), ナゲル (投げる), アルク (歩く)。

#### ② 差異の認められる語彙

カエル / カエル (帰る) = 8 : 2。

3音節動詞に関しても, 2音節動詞の場合と同様に,  
 語アクセントの型の, 地域における統一性, 安定性は,  
 高い。3音節動詞の「帰る」は, 現代東京語のと同じ  
 「カエル」が主でありつつ, 少年・壮年の各1人が,  
 「カエル」を堅持するという混態を見せている。

#### (8) 4音節動詞の場合

##### ① 10人に共通する語彙

アツマル(集まる), イツワル(偽る), ヨロコブ(喜ぶ), カサネル(重ねる), ナラベル(並べる), カゾエル(数える), コタエル(答える), シラベル(調べる), ナガレル(流れる), タスケル(助ける), ハナレル(離れる), カクレル(隠れる)。

##### ② 差異の認められる語彙

アザケル/アザケル(嘲) = 7 : 3, ウカガウ/ウカガウ(窺う) = 9 : 1, ヤシナウ/ヤシナウ(窺う) = 8 : 2。

以上の4音節動詞の語アクセントは、大体において、安定した型の一致が認められる。

語アクセントの全体を通して言えることは、高懸村の方言語アクセントの体系は、東京語のそれと、よく似ている。しかし、詳しく分析すると、世代ごとに、少しずつ、従来の高懸村の方言の語アクセント体系を動かそうとする異化作用が見られる。それが、時に、頭高型化という現象になって示され、結果的には、共

通語の形とよく似た語アクセントを見せる場合もあった。少年層者(10才台)と壮年層者(30才~40才台)との比較においてさえ、語アクセントに動きが認められるのである。語アクセントは、固定的なものではなく、流動的なものだと感がある。

#### ○おわりに

日本全土における多数の方言共時態の方言実相について、記述的研究が行われ、統合整理され、高い見地に立って、日本語方言の歴史的現実態の研究が展開されなければならない。方言の記述的研究は、方言の地理学的研究と調和的に、発展せしめられる必要がある。文化的複合体としての方言を研究する方言学のためには、自在な方言の研究が、豊かに構想されてよいと思う。

方言的自由の精神と事実とに見出される、全人類的法則の発見のためには、方言研究の道は、無限であるとも言える。(1980.9.9)

A Descriptive Study on the Dialect of Takasu-mura, Gujô-gun,  
Gifu-prefecture

Yoshio Ebata

In the present paper, we have studied the Dialect of Takasu-mura, Gujô-gun Gifu-prefecture from the following three view-points.

1. Expression and Life

Here we have treated the expression of treatment proper in this district, and made clear the actual aspects of respectable expressions, modest expressions, and polite expressions, focusing our attention on honorific verbs and auxiliary verbs used in them.

2. Vocabulary for Daily Life

We have tried to systematize the main lexical sets of the basic vocabulary which they use daily in their agricultural and forest life.

3. Pronunciation and Life

We have analyzed and examined the data of word accent obtained from 10 informants. The system of word accent in this district closely resemble to that of Tokyo. But it has been recognized that there is a slight dissimilation phenomenon to change the accent system in the young people.

We hope that descriptive studies should be performed of synchronic aspects of various dialects of Japan. And these studies should be unified with dialect geographical studies and synthesized to be a global study, for it will be desirable that historical present aspects of dialects are ideally studied.